

2024年3月17日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ39「父母を敬え」

箴言1：8～9、コロサイ3：18～24

問104第五戒で、神は何を望んでおられますか。

答 わたしがわたしの父や母、またすべてわたしの上に立てられた人々に、あらゆる敬意と愛と誠実とを示し、すべてのよい教えや懲らしめには、ふさわしい従順をもって服従し、彼らの欠けをさえ忍耐すべきである、ということです。なぜなら、神は彼らの手を通して、わたしたちを治めようとなさるからです。

この問答をお読みになられて何をお感じになられたでしょう。もっともだと考える人もいらっしゃるでしょう。しかし同時に首を傾げてしまう人もおられると思います。複雑な家庭環境があります。子どもに対する虐待の問題があります。先日も新聞に実の父親から性的虐待を受けた人の記事がありました。いたたまれない思いがします。それでも聖書は「父母を敬え」と教えるのでしょうか。しかも信仰問答では「彼らの欠けをさえ忍耐すべきである」とありますから、そのような親でも我慢して、忍耐して受け入れるように教えているのでしょうか。さらに「すべてわたしの上に立てられた人々」と信仰問答はその敬うべき対象、範囲を広げています。先生や上司、先輩、それだけではありません。ここでは為政者、国家を考えることもできます。尊敬できる先生や上司ならいいでしょう。でもそのような先生や上司とは限りません。また様々な疑念を持たれている政府に対して従順をもって服従するというのはいかがなものでしょう。わたしたちは抵抗権を持つ成熟した市民なのです。それでも信仰問答は、そのような上に立つ権威に対しても無条件に従えと教えているのでしょうか。

実は、ここまでで申しましたことは、一つ大事な視点が欠けております。それは信仰の視点です。信仰がなければ、すべてはわたしたちの人間関係のレベルにおいて完結してしまうでしょう。つまり尊敬できる親や上司なら尊敬するし、そうでなければ尊敬できない。そこで話は終わりです。わたしたちのあらゆる人間関係はそこで止まっています。それはその人間の資質、人間性の上に成り立つ関係だからです。信仰問答では「あらゆる敬意と愛と誠実とを示す」とあるように、これは強いられることではなく心から湧き出るものです。強いられてではなく、心から父母に従う、すべて上に立てられた人々に従う道がある。それを信仰問答は教えています。たとえ、尊敬できない親や上司であっても、敬意と愛と誠実を持って接することができる、そういう新しい親子関係、人間関係を切り開こうとしています。

その鍵となる言葉が「神は彼らの手を通して、わたしたちを治めようとなさるからです」という部分です。ここでいう「彼ら」というのは、父母、すべてわたしの上に立てられた人々です。当然そこには彼らの欠けも含まれています。ここで重要なことはその「欠け」を他人事にしてはいけないということです。いつまでも欠けのある親たち、欠けのある上司や目上の人たちを批判して自らを省みないということがあってはいけません。自分もまたその欠けのある親であり、上司となり得ること。また自分も親を敬えない者であること。多くの聖書学者が言うのは、この「父母」は年老いた父母であるとし、老いた親をだんだん敬うことができなくなる。そこにもわたしたちの「欠け」があります。けれどもそのわたしたちを通して、神さまはわたしたちを治めようとなさる。その欠けをさえ用いて、神さまはそこにもご支配を表してください。それはわたしたちにとって救いではないでしょうか。完璧な親、完璧な子育てというのはあり得ません。完璧な介護もないでしょう。わたしたちはどこかに後ろめたいものを引きずっています。けれども、どんなに失敗しても、神さまはその関係をご支配の中に留めてく

ださる。それは神さまのご支配の中で修復可能だということです。わたしたちはそのことを信じたいのです。

考えてみれば、聖書の描く親子関係ほど酷いものはありません。旧約聖書のアブラハム、イサク、ヤコブの物語も美しい模範的な親子関係が描かれているわけではありません。親の偏愛がありますし、子も老いた親を平気で騙します。ヤコブは息子たちに言いました。「お前たちは、この白髪の父を、悲嘆のうちに陰府に下らせることになるのだ」(創世記42:38) どのような思いでヤコブはこの言葉を語ったでしょう。新約聖書では、あの放蕩息子の譬えを思い起こして下さってもよいでしょう。あの二人の兄弟もまたそれぞれ違う形で父を苦しめました。弟は家を出て行き、受け継いだ財産を散財してしまいます。兄もまた弟が許せないし、その弟を許す父が許せないのです。それは紛れもなく、わたしたちの親子関係であり、家族の物語です。

実は、その修復不可能な完全に歪んでしまった関係こそ、神さまとわたしたちの関係ではないでしょうか。でもその歪んだ関係を神さまが修復して下さる。冷え切った関係を結び直して下さる。それがイエス・キリストの救いです。イエスさまが十字架とよみがえりの御業によって、わたしたちの罪を赦し、御前に子として受け入れて下さる。イエスさまに合わせられて神さまの子としていただいた。だからこそ、わたしたちは神さまに向かって「父よ」と呼びかけることができるのです。そこにわたしたちの親子の救いもあります。

先月、佐藤陽一兄を神さまのもとに送りました。亡くなるその日もわたしと電話で話をしていました。電話で彼は信仰問答の間104から質問をしました。この時、陽一君は親子喧嘩をしていたのです。だから「父母を敬え」という御言葉が頭に響いていた。果たして自分はこの御言葉に生きているだろうか。むしろお父さんお母さんを困らせ悲しませることばかりしてきた。こんな自分をお父さんお母さんは赦してくれるだろうか。子としてくれるだろうか。陽一君がこの二、三年、熱心に教会に通っていたのは親子になるためだったのではないのでしょうか。彼は本当にお父さんお母さんが大好きでした。親を困らせ、息子と呼ばれる資格はないかもしれない。でも息子でありたい。あり続けたい。その思いで教会に通っていたのだと思います。お父さんお母さんもそうです。本当に親になりたかった。わたしの手元に何通ものお手紙があります。どのお手紙にも息子さんを思う気持ちが込められております。

わたしたちは、みんなそうやって生きているのではないのでしょうか。親子なんだけれども親子になれない。兄弟だけれども兄弟になれない。夫婦なんだけれども夫婦になれない。みんなそこでもがき苦しんでいるのです。わたしたちはそんなに器用ではありません。でもそれでもいい。神さまはそのようなわたしたちを赦して下さり、わたしたちを神さまの子として下さる。いつもその大きな愛で包んでくださいます。だからこそわたしたちは神さまの愛によってその破れを覆われて何とか親子でいられるのです。わたしたちの「父母を敬う」歩みもようやくそこから始まるのでしょうか。

天の父よ。わたしたちの破れた関係を修復し、本当に親子にするためにあなたは御子イエス・キリストを与えてくださいました。そしてその命をもって全力でその破れ修復して下さる恵みを感謝いたします。どうぞこの救いによって、与えられた関係を見つめ直し、新たな関係を結んでいくことができますようにお導きください。主の御名によって祈ります。アーメン。